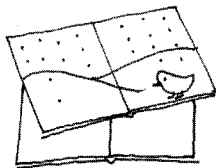


特集

緑蔭図書紹介

ぐるぐる・もぐもぐ
たのしいね

山崎 奈美



三歳児の周りには、たくさん音があります。その音は、子どもたちの心を動かし、思わずやってみたくなる不思議な力をもっています。

「とんとんとん」

砂でいっぱいになったバケツを片付ける時の音。

子どもたちがひとしきり砂場で遊んだ後、砂が

入っているバケツを、そのまま片付けようとしていました。

保育者が「とんとんとん」と砂場のへりで砂を落としてみせると、子どもたちはくぎづけになってその様子を見ていました。

繰り返しやっているうちに、子どもたちも同じように「とんとんとん」と砂を落とし始めました。

「良い音だね」

「わたしの良い音だよ」

と言いながら、音を楽しんだことがありました。

「くるくるくる」

自分のタオルを丸める時の音。

タオルを自分のカバンにしまう時は、「くるくるくる」と呪文を唱えます。すると、できないという子も、あつという間に丸めます。三歳児は音と仲良しだなと思います。

このように音と体が響き合いやすい三歳児は、まか不思議な音が並んだ絵本も、全身で面白いと感じるのでしよう。読み聞かせの後、その不思議な世界を楽しんだことがあります。

◆ 『きたきたうずまき』

『きたきたうずまき』(元永定正作 福音館書店)

(二〇〇五年)は、いろいろな色や形のうずまきがたくさん出てくる絵本です。

絵本を読んだ後、子どもたちと一緒にうずまきになって動いてみることにしました。保育者が「ぐるぐる」と言いながら、手を広げて回り始めると、Aちゃんが同じように、「ぐるぐる」と回り始めました。それを見たBちゃんは、びよんびよん跳び始めました。楽しい雰囲気につられ、三人、四人と人数が増え、中には、保育室を走り回る子もいました。「くるくるぐるぐる」という保育者の言葉を聞きながら、喜々として体を動かして楽しんでいた子どもたち。

ところが、突然泣き声
が保育室に響きました。
動きが大きくなりすぎ
て、子ども同士がぶつか
り始めたのです。泣いて



いる子をながさめながら、そろそろこの活動を終わりにしようと思つた時でした。ふと振り向くと、子ども同士で手をつなぎ、楽しそうに回つていたので、それを見た子どもたちも、同じように手をつないで回り始めました。泣いていた子も輪に入ると、笑顔が戻りました。

思わぬ姿に保育者はびつくりしてしまいました。これまで、手をつないで遊ぶような姿は見られなかつたからです。「ぐるぐる」は友達と手をつなぐ魔法の音になりました。

◆ 『も』 『も』 『も』 『も』

『もこ もこもこ』（谷川俊太郎作 元永定正絵 文研出版 一九七七年）は、不思議な物体がもこつと地面のようなどころから出てきたり、膨らんだり、はじけたり、なくなったかと思つたら、またもこつと出てくる絵本です。



不思議な世界を楽しもうと、言葉や間を大切に読んで読みました。すると子どもたちは、保育者の言葉を山びこのようにまねするようになり、隣の子と顔を見合わせ笑っていました。絵を見ながら、

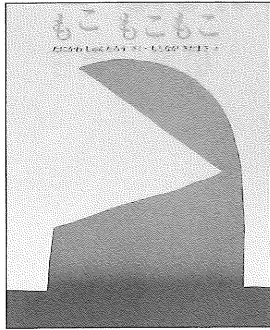
「また出てきた」

「太陽になったね」

など、思い思いにつぶやいている子もいました。

読み終わり、そつと絵本を閉じた後、「もこっ」と保育者が絵本のまねをして、体を動かしました。

すると「もこっ」と子どもたちは保育者のまねをしました。そんなやり取りはたちまち保育室の雰囲気を変え、「もこっもこっ」と言いながら、動き始めました。ちょうどその日は公開保育の日でしたので周り



には大人が大勢いましたが、温かいまなざしを受け、楽しく動き回る子どもたち。あちらこちらに行くと、友達と顔を見合わせながら跳んでいる子、席で小さく体を動かす子など、さまざま姿を見せていました。保育者が「帰っておいで」と呼びかけ、「おかえり」と一人ひとりの肩をなでて、この遊びは終わりました。「もこもこ」は、音の響きを体で感じながら、先生や友達のそばで動くことがとっても楽しくなる、愉快的音になりました。

絵本から広がる子どもたちの豊かな体の動きやつぶやきは、保育者の想像をはるかに超えています。どんな世界でも自分の楽しみに変えてしまう子どもたちをうらやましく思います。素朴な音やリズムを楽しむ、そして、読み聞かせの面白さを一緒に味わった出来事でした。

(東京学芸大学附属幼稚園 小金井園舎教諭)